大学構内におけるアウトリーチ説明会の開催 ：医学図書館の情報リテラシー教育の可能性

石井 保 志*

東京医科歯科大学附属図書館

I. はじめに

現在、図書館で一般的に行われるオリエンテーション、OPAC 講習会、各種データベース利用説明会など、情報リテラシー教育に関するイベントの多くは図書館内のスペースを利用して行われている。なかでもデータベースの利用説明会は、実習用端末やスクリーンを必要とすることが多く、通常、図書館側が事前に通知した会場・時間で行われており、参加者は指定された開催日時に会場である図書館へ足を運ぶことになっている。しかし、図書館へ利用者が能動的に足を運ぶ形式の説明会は、医歯薬学系図書館のサービス対象者（研究者、臨床医、看護師、大学院生など）の情報探索行動、勤務体系、自由時間等を知り尽くした上で果たして設定されたものなのだろうかという疑問を持った。実はきわめて参加しにくい設定を長年に亘り慣習的に行っていて、参加するための諸条件をクリアした限られた人に対してのみ説明会を行っていたのではないだろうか。

そのような疑問から東京医科歯科大学附属図書館（以下当館）では、全学の利用対象者がデータベースの説明会に参加しやすい環境を提供する戦略として、大学内の各所に図書館が出張して利用説明会を開催することにした。利用者が図書館に来てもらう説明会ではなく、会場を各部局に求め、図書館が積極的な『説明会の出前』をするアウトリーチ説明会を展開した。

このアウトリーチサービス（Outreach service）とは「手を差し延べる」という意味で、図書館サービスが今まで及ばなかった人々に対してサービスを広げることであり、公共図書館の世界では日常使用されているサービス概念である。現在多くの公共図書館では、アウトリーチサービスとして幼稚園や学校へ出張し、ブックトーク

や絵本の読み聞かせをする「お話会の出前」、入院患者へ図書を提供する病院図書サービス、障害者施設等への図書サービスや在宅老人への図書配達サービスなど、図書館へ来られない利用者に対するサービスを行っている。アウトリーチサービスは「いつでも、どこでも、だれにでも」をモットーとする公共図書館の重要なサービスのひとつとして認識されている。当館はこの「図書館サービスが今まで及ばなかった人々」を医学図書館利用者に置き換え、いかに図書館サービスを大学内の末端まで届けることが可能かリサーチを行った。ここでは、『大学構内に散在する利用者に対して、その利用者の各持ち場における日常の行動範囲内で図書館側が説明会を設定し、自発的な動機で参加をうながす。』ことをアウトリーチ説明会と定義することにする。

本稿は、当館が2003年初頭に学内の10ヶ所（図1）で5日間に亘り開催した『アウトリーチ説明会』の実践例を報告し、アウトリーチサービスが医学図書館に有効な手段であるかどうかの検証を行ったものである。

図1. Web of Science 説明会の開催会場（湯島地区・駿河台地区）

*Yasushi ISHII: 〒113-8510 東京都文京区湯島1-5-45.
ishii.lib@tmd.ac.jp

(2003年6月3日 受理)

II. 利用説明会の現状

国内の情報リテラシー教育の先進的な例として、三重大学附属図書館の実践¹⁾は注目すべきものがある。同大学では、情報リテラシー教育支援メニューとして、出張講習会、データベース別説明会などできめ細やかな教育支援が数多く設定されている。また授業やゼミ単位での学習プログラムと連携させるオーダーメイド講習会もすでに実施しており、総合大学図書館のコア・コンピタンス（中核能力）として大規模な情報リテラシー教育事業に取り組んでいる。

総合大学の中でも医歯薬学系学部は、独自に総合大学とは別のキャンパスを構えることが多い。医歯薬学系の大学構内には総合大学構内とは違う様々な特殊な要素が凝縮されている。人的に多くの職種の人が存在し、勤務形態もさまざまであり、勤務時間ひとつとっても、研究者は比較的自由であるが、臨床医をはじめとする医療従事者は、交替制勤務などで、図書館利用の時間的制約が非常に多い。

また、大学附属病院を有するため、建物は高層化と増改築を伴い、空間的に複雑かつ広範囲で分散的な施設配置になっている場合が多い。

図書館は説明会の開催日時を設定する際に、このような利用者行動の多様性、複雑な導線を経て会場までどり着くアクセスなどを考慮しているのだろうか。事前申込みが必要となれば、かなり仕事がスケジュールどおり運ぶ職種か、授業カリキュラムを知っている学生のみしか申込みしないということになる。従来の説明会は、前述の諸条件を偶然にもクリアした利用者が享受できる講習会であった可能性もある。

参加者は、開催日時に自分を合わせたのか、それとも自分の空き時間が偶然にも説明会等と重なり参加が可能になったのか不明である。このような説明会を開催した場合、大概アンケートを記入してもらい、開催日時が適切か否かを記入してもらうことが多い。しかしアンケートは、「参加できた」人が回答したものであり、参加しなくても参加できない、開催自体を知らない潜在的なニーズの処理が行われてきたかどうか疑問に思っていた。もしかすると、利用説明会の設定は図書館の一人よがりであり、本来参加したい人が参加できない状況に設定されていないか、医学図書館では議論されていない印象を持っていた。

III. Web of Science の導入と説明会開催の経緯

昨今、研究者や研究機関の業績評価手段として、論文の被引用回数を用いる評価方法が大学に浸透してきている。また 2003 年 3 月は文部科学省が推進する「世界的研究教育拠点の形成のための重点的支援（いわゆる 21 世紀 COE プログラム）」（以下 COE）の申請の締切月であり、各大学には COE 対策本部が設置されるなど、大学の名誉と予算の獲得をかけて戦略を練っていた。

そのような背景も関連して、東京医科歯科大学（以下本学）では 2003 年 1 月から米国トムソン ISI 社の引用文献データベース Web of Science を導入し、当館ホームページを通じて全学提供を開始した。Web of Science は、国際的に高い評価を受ける学術雑誌のデータを収録し、研究論文の引用相関関係に着目した引用文献データベースである。本学では 1993 年以降のデータを購入した。2003 年 2 月は 21 世紀 COE プログラムの申請締切りが間近となっており、特に医学分野の申請があるため、本学事務当局は Web of Science を活用する学内評価に関心を持っていた。そして事務当局より本学研究者の論文の被引用回数の検索方法について当館に問合せが頻繁にあった。

当館では、Web of Science が導入されたことを全学に広報するとともに、Web of Science が業績評価のみに利用するデータベースとして間違った認知をされるのを恐れた。Web of Science は研究論文の引用の系譜を辿ることによって、先導的な研究を知ることや、文献を通じて客観的に分野間の関係がわかるなど非常に優れたデータベースである。

この時期に全学向けの利用説明会を開催し、Web of Science を正しく理解してもらうことは当館の役割であると強く認識し、また研究者が最も欲している検索結果を導く支援を行う必要を感じていた。

そのためにまず、多くの教職員に一気に普及拡大をはかるため、当館では利用マニュアルの暫定版を急遽作成し、図書館長名で全講座に配布した。

IV. 参加を誘発するアウトリーチサービス

利用マニュアルを図書館でも配布すると、用意したかなりのマニュアルの数量がなくなり、必要に迫られている利用者も多いことがわかってきた。このような学内的状況から、当館では Web of Science を一気に全学へ普及させたいと考えるようになった。

本学は、東京都文京区をメインキャンパスとする医歯学総合大学である。大学の敷地を都心に持つため、国立大学の中ではかなり狭い敷地のほうで、そのなかに高層ビルが乱立するキャンパスでもある。また神田川を挟んで徒歩5分の距離に湯島地区と駿河台地区という両地区がある。当館が利用者対象者と考えている人々である学生、教職員数は約4,200人である。

この潜在利用者に対して、Web of Science を周知することは、当館で利用者を待つだけでは実現しない。大学施設の各階には、様々な部局のゾーニング、職種、研究室などが入り乱れており、またそこで働く人々の勤務形態も24時間交替のところも少なくない。特に大学病院を抱えているため、多忙な医師や看護師に時間を割いて説明会にきてもらうことはなかなか難しい。そのようなことから、利用者を「待ち受ける」方式から、積極的に説明会を利用者の近くに届ける説明会構想が浮かんできた。

本学の狭隘な敷地に、前述の職種や勤務体系を考慮に入れると、従来の説明会の開催時間や大学内の導線から外れた図書館での開催では、利用者に満足してもらうという点で不十分であると考えた。医学図書館においてアウトリーチサービスの概念は馴染みのあるものではないが、利用者のニーズを把握する可能性があり、試行的に計画することにした。

V. 会場準備と広報

予備調査と準備を兼ね、大学構内にある全ての講義室、会議室を徹底的にリストアップし、実際に部屋に足を運んでみた。候補の部屋では説明会開催に最低限必要な環境として、マイク、電源位置、空調、プロジェクター、スクリーン、LAN環境（情報コンセントの有無）を確認した。

会場決定にあたり重視しなければならない点として、各部局から近い部屋であるか、日常馴染みのある部屋か、大学構内の主要導線から外れすぎていないかを注意し、説明会会場を大学敷地内にバランスよく選択し、部局の主要空間、高層階への移動への配慮などを検討し、利用説明会会場を決定した（図2）。様々な部署で管理されている会場の予約をとり、講義室は授業時間の終了時刻を確認した。今回、学部学生を主たる対象しなかったため、勤務時間の合間に参加できる開始時間として、利用説明会の時間設定は、研究者対象の会場は16時前後、臨床医対象の場合は18時以降の開催とした。会場では

インターネットを利用しデモを行うため、事前にIPアドレスを取得し、説明会前日には会場に足を運び必ずパソコンの接続確認を行った。

1会場には下見、前日確認、説明会当日の計3回行き、10会場分で30回は足を運んだことになる。準備は職員1名、非常勤職員1名が日常業務の合間に行った。

説明会の成功を左右する重要な点は広報である。当館では「図書館ニュース」という、ワープロ原稿をA4版色紙1枚ものの簡単なニュースレターを数年来発行している。手軽に作成・配布できる点で、図書館の情報発信メディアとしては、原始的だが広報の効果は高いものがある。さらに図書館ニュースの各部局版を作成し、研究室等の近くで説明会を開催する旨をPRした。その他に当館ホームページ上でのお知らせと同時に、メールで参加者の申込み受付を行った。

VI. 説明会の開催

説明会の講師は図書館職員及びトムソン ISI 社の合同で行った。説明会の設定時間は Web of Science 利用法

自分の研究論文の引用関係がわかるデータベース

Web of Science の利用説明会

学内10ヶ所でデモと利用相談を行います。

Web of Science は、引用文献データベースの Web 版です。
このユニークなデータベースの利用法に触れて頂くため、利用説明会を学内各所で開催致します。
是非ご参加頂き、研究活動にお役立てください。

説明会概要

【開催日時・場所】1月22日（水）～2月14日（金）

下記参照（学内10ヶ所）

【講師】図書館職員およびトムソン ISI 社（Web of Science 作成会社）

【プログラム】利用法説明およびデモ（50分）

質疑応答（10分）

※各回とも同内容です。ご都合の良い回にご参加ください。

【参加申込方法】：図書館へメールでお申込み下さい。E-Mail: online-j.lib@tmd.ac.jp

※申込時に希望日・回・氏名・所属部局・内線番号をお伝え願います。

開催日	回	部局	会 場	講習時間	備考
1月22日(水)	①	共同教育研究センター	共同教育研究棟4F会議室	16:00～17:00	
	②	歯学部	歯学部第4講義室(歯学部校舎棟4階)	18:00～19:00	終了後7分休憩あり
2月6日(木)	③	難治疾患研究所	難研2階ゼミナール室(駿河台地区2F)	16:00～17:00	
	④	医学部附属病院	B棟症例検討室(医科新棟5F)	18:30～19:30	
2月10日(月)	⑤	歯学部	歯学部特別講義室(歯科事務棟4F)	16:30～17:30	
	⑥	医学部	臨床講義室(2)(医科新棟B1F)	18:30～19:30	終了後7分休憩あり
2月12日(水)	⑦	生体材料工学研究所	生材研3階ゼミナール室	15:30～16:30	
	⑧	歯学部	歯学部第4講義室(歯学部校舎棟4F)	18:30～19:30	終了後7分休憩あり
2月14日(金)	⑨	難研(湯島地区)	新II講義室(3号館4階)	16:30～17:30	
	⑩	医学部	臨床講義室(2)(医科新棟B1F)	18:30～19:30	終了後7分休憩あり

図2. 図書館ニュース No.23 (2003年1月17日発行)

Web of Science 利用説明会 アンケート集計結果

今後の参考にご協力頂ければ幸いです。該当に○印をご記入ください。

I. 今後どのように Web of Science を活用されますか？

1. 自分の論文を検索する。	34人
2. 研究の系譜をたどる。	57人
3. 所属講座の業績調査。	12人
4. 論文の被引用回数を調べる。	48人
5. 研究テーマを決める材料として使う。	39人
6. その他	5人(医員)

II. 説明会を何で知りましたか？

1. 図書館ニュース	55人
2. 図書館ホームページ	4人
3. 講座の掲示板	26人
4. 同僚から	8人
5. その他	13人(メール、教授から、廊下の掲示板)
	(医局会で医局長の口頭説明お知らせで)

III. ご所属と職名を教えてください。

参加者の所属内訳：

医学系	25人	生材研	17人	教養部	1人
歯学系	38人	臨研	6人	事務部	0人
医病	0人	共教研	6人	その他	4人(うち保健衛生大学院2人)
歯病	1人				

参加者の職名内訳：

教授	9人	学部学生	0人	事務官	0人
助教授	15人	研修医	1人	その他	10人(技術補佐員、秘書)
講師	7人	大学院生	22人		
助手	26人	技官	7人		

IV. ご意見・ご要望

- 初級コースより、いろいろなコースの解説プログラムも開催してほしい。
- 本学は、留学生もかなり受け入れているので、英語のパンフレット（取扱説明書）も作成してもらえるとありがたい。また英語での説明会も、1、2度開催してもらえるとありがたい。他15件

図3. Web of Science 利用説明会アンケート集計結果

らせを知ったという回答者も多かった。掲示板に貼られたお知らせは図書館ニュースであろうことから、紙媒体で直接見た効果が大きいことがわかった。

VIII. おわりに

全10回のアウトリーチ説明会を開催した結果、期待される効果としては下記の事項が考えられる。

- ①自発的な参加をうながし、データベースを知る機会を与える。
- ②図書館を大いにPRすることが可能である。しかも

開催に要する諸経費は限りなくゼロに近い。

③情報リテラシー教育に積極的に関われる。

④エンドユーザーのニーズを把握することが可能である。

⑤参加対象者の主題ターゲットに合わせた参考例の説明が可能である。

通常、図書館を会場とする1、2回の説明会では「知る人ぞ知る」説明会になる危惧があった。本学の敷地は狭隘であるため、図書館1ヶ所で開催すればこと足りるように思っていたが、附属病院や研究所をかかえる大学は、雑居ビルに居住する別会社の集合体のようであり、各会社に出向いてニーズを把握する必要を感じた。

なお、図書館界ではアウトリーチのほかにも様々な図書館現場で獲得してきた概念が豊富にある。例えば「エクステンションサービス」は図書館を利用したことのない人に目を図書館に向けさせ、利用の拡大を図るため、宣伝などの館外活動を行うことを指す。このような他館種の経験を医学図書館に導入すれば、エクステンション説明会、テラーメイド説明会など、今までとは違う利用者獲得が可能かもしれない。今後、来館型サービスや非来館型サービス（オンラインジャーナル提供など）に続き、図書館が積極的に利用者の中へ飛び込んで行く姿勢は増々重要になると言えよう。

本説明会の開催にあたり、トムソン ISI 社渡辺麻子氏には随時適切なアドバイスを頂き、また本学各部局関係者には準備を含め、大変お世話になったことに感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 杉田いづみ、河谷宗徳、後藤美由紀、三重大学附属図書館の情報リテラシー教育支援、情報の科学と技術 2002;52(11):569-74.
- 2) 高橋克明、横浜市立大学学術情報センターにおける情報リテラシー教育への取り組み、薬学図書館 2002;46(4):307-11.
- 3) 安藤友張、図書館利用教育・情報リテラシー教育をめぐる動向：1991～2001、情報の科学と技術 2002;52(5):289-95
- 4) 上原恵美、琉球大学附属図書館における情報リテラシー教育、大学図書館研究 1998;54:55-65